

書 評

上野和彦・小俣利男編：『東京学芸大学地理学会
シリーズⅡ 第4巻 東京をまなぶ』古今書院、
2019年1月刊、120p.、2,800円（税別）

東京は、1603年に徳川家康がこの地に幕府を開いた江戸時代から、約400年の歴史の中で様々な過程を経て、日本の首都として発展している。東京は政治や経済、文化・流行の影響力という側面からみても日本の中心であり、現在約1,300万人がくらす世界有数の大都市である。

都市は、人類の最高傑作（最高発明）などといわれるが、生き物のように変化し続けて世界都市までのほりつめた東京は、その成功例の一つであろう。東京はヒト・モノ・カネ・情報が大量に行き交い、世界都市、日本の首都、ビジネス都市、観光都市、生活都市など様々な顔を持つ。

本書は、東京学芸大学地理学会創立50周年記念事業の一環で、2002年～2007年にかけて「東京学芸大学地理学会シリーズ（全4巻）」の後継のシリーズⅡの第4巻である。本書は生活都市として身近な地域の変化や日常生活上の問題から東京を理解する内容となっている。執筆陣は、東京学芸大学地理学会の母体である東京学芸大学地理学研究室の教員とそこで地理学を専攻し、後に東京圏で小・中・高校の教員や大学研究職に就いた卒業生・修了生の計22名が担当している。

本書の構成は、以下の7章から成る。

i はじめに

第1章 東京の形成

- 第1節 江戸の城下町（古田悦造）
- 第2節 近大期の土地利用（上野和彦）
- 第3節 行政区域の変遷（上野和彦）

第2章 人口と土地利用

- 第1節 人口の変化（沖田耕一）
- 第2節 現代の土地利用（上野和彦）
- コラム1 東京湾埋立地争奪戦（石田典行）

第3章 地域のしくみ

- 第1節 都市圏と都市構造（牛垣雄矢）
- 第2節 郊外化と住宅開発（上野和彦）
- 第3節 過疎と地域振興（小俣利男）
- 第4節 伊豆大島の諸相（平本和香子）

第4章 くらしを支える

- 第1節 ものづくり（本木弘悌）
- 第2節 食を支える農・水産業（佐々木智章）
- 第3節 卸売市場と商店街（内藤 亮・木谷隆太郎）
- 第4節 水と電気の地域的需給（有賀夏希）

- コラム2 東京工業の革新：歴史と産業の持続性（上野和彦）
- コラム3 築地から豊洲へ（石田典行）

第5章 安心・安全なまちづくり

- 第1節 自然環境と災害（原 芳生）
- 第2節 災害と都市構造（大矢幸久）
- 第3節 地域社会の安全（栗原 清）
- コラム4 下町低地の景観（沢辺朋史）

第6章 共生のまちづくり

- 第1節 教育と福祉（永山淳一）
- 第2節 まちの国際化（田部俊充）
- コラム5 東京で学び、働き、ビジネス展開する外国人（上野和彦・椿 真智子）

第7章 世界・日本・東京

- 第1節 世界・東京・地域（牛島庸介）
- 第2節 情報と文化の発信（立川和平）
- 第3節 観光地と観光行動（高木佑也）

各章の具体的な内容については、iはじめにでは、編者らが本書で東京を取り上げる経緯を述べている。そして、本書では東京の各市町村を個別に記述する地誌的手法を採用せず、東京という地域の中から生活に密着したテーマを設定して、その地域の特徴と課題を地理学の立場から抽出し、東京の理解を深めるための素材を提供することを目的としていることが述べられている。

第1章では、「東京の形成」をテーマに「江戸の城下町」「近大期の土地利用」「行政区域の変遷」について取り上げている。江戸の城下町については、政策的な人口集中、火災などによる人口変動は、町のあり方や江戸の範囲の拡大に大きな影響を与えてきたことを解説している。

次に、近代期からの土地利用については、本書の表紙を飾っている東京駅の建設を契機に大手町から丸の内、霞が関、現在の有楽町一帯が政治・経済の中核管理機能を担う官公庁と企業が集中したことを解説している。

行政管轄区域の変遷については、江戸から東京に改称後から1960年代後半に現在の行政管轄区域が確定されるまでを解説している。

第2章では、「人口と土地利用」をテーマに「東京の人口の変化」「現代の土地利用」について取り上げている。東京の人口の変化については、人口の地域的動向は都心から周辺部、多摩地域へと同心円的増減が繰り返されてきたことと、近年、外国人流入による東京の人口増加を解説している。また、東京の人口構造の変化と昼夜間人口の分布とその特徴が解説されている。

次に、現代の東京の土地利用については、第二次世界大戦後から都市化・工業化の進展による変化を解説している。東京の人口増加によって、土地を効率的に利用するために建物高層化が進み、とくに、1990年代半ばから規制緩和などによって、都心や湾岸地域を中心に超高層マンションの

建設が増加していることを解説している。

章末のコラム1では、東京湾埋立地争奪戦について紹介している。

第3章では、「地域のしくみ」をテーマに「都市圏と都市構造」「郊外化と住宅開発」「過疎と地域振興」「伊豆大島の諸相」について取り上げている。都市圏と都市構造については、東京大都市圏、東京区部、中心商業地の構造を解説している。それに関連して、1960年代からの東京における郊外化と住宅開発を解説している。

過疎と地域振興については檜原村を事例に、また、伊豆諸島の諸相については大島町を事例に解説している。

第4章では、「くらしを支える」をテーマに「ものづくり」「食を支える農・水産業」「卸売市場と商店街」「水と電気の地域的需給」について取り上げている。ものづくりについては、東京工業の動向と長い歴史の中で大都市の需要や先端性に対応した業種の展開、特徴ある産業集団の形成を解説している。また、東京都心に集積がみられる印刷・同関連業、大田区の産業の地域的コンプレックス、多摩地域の自動車工業や電機・精密機械工業の工場再編を解説している。

次に、食を支える農・水産業については、まず東京の農業が都市化・工業化によって縮小しながらも効率の高い農地利用による高い生産性とブランド力を武器に持続していることを解説している。また、その事例として、江戸川区の小松菜産地を紹介している。東京の水産業については、東京湾で行う内湾漁業と伊豆・小笠原諸島周辺での島しょ漁業の概要と、東京湾で行う漁業の江戸前の意味の変容を解説している。

卸売市場と商店街については、生鮮食料品流通において重要な役割を果たしてきた中央卸売市場の分布と機能を解説している。商店街については、郊外への大型小売店の進出などによる地元商

店街の衰退、コンビニエンスストアの立地展開を解説している。

水と電気の地域的需給については、東京の上水道で江戸時代の玉川上水の開発と、1960年代から水の需要の拡大を図るために、新たな水源の確保と上水道システムを解説している。

次に、電力の地域的需給については、第二次世界大戦後からの電力供給の変化と東京電力の各種発電所の立地などの特徴から、東京の電力が他地域依存の構造を解説している。

章末のコラム2では、荒川区の自動車製造業を事例に東京工業の歴史と産業の持続性について、また、コラム3では築地市場から豊洲市場への移転について紹介している。

第5章では、「安心・安全なまちづくり」をテーマに「自然環境と災害」「災害と都市構造」「地域社会の安全」について取り上げている。自然環境と災害については、東京の地形の特徴を解説し、そして、東京に古くから被害をもたらしてきた内水氾濫とその変容、行政の水害対策、ハザードマップの活用を解説している。

災害と都市構造については、都市と災害の関係を解説し、それに関連して、足立区と品川区の木造住宅密集地域について紹介している。

地域社会の安全については、東京の犯罪発生の様態と、北区を事例に犯罪の発生日数と発生場所、街の安全対策を解説している。

章末のコラム4では、東京東部の隅田川や荒川、江戸川に挟まれた大雨や地震などの被害を受けやすい下町低地について紹介している。

第6章では、「共生のまちづくり」をテーマに「教育と福祉」「まちの国際化」について取り上げている。教育と福祉については、東京での教育の機会、医療と地域の概要、保育問題を解説している。それに関連して、武蔵小金井市を事例に保育施設の分布とその特徴が解説されている。

次に、まちの国際化については、東京の外国人人口の推移と分布、外国人の居住地とすみ分けを解説している。それに関連して、豊島区を事例に多様な外国人の分布と共生のためのまちづくりについて紹介している。また、章末のコラム5では、東京で学び、働き、ビジネス展開する外国人について紹介している。

第7章では、「世界・日本・東京」をテーマに、「世界・東京・地域」「情報と文化の発信」「観光地と観光行動」について取り上げている。世界・東京・地域については、「世界の都市ランキング」のデータをもとに各分野で東京の評価が高いことと、東京のGDPと区市町村別の課税所得とその分布などから豊かさの配分を解説している。

次に、情報と文化の発信については、東京の情報文化の多様性、情報通信業の東京集中、文化の発信とその担い手を解説している。

観光地と観光行動については、日本の観光客と宿泊施設の動向、東京の観光資源と日本人および外国人の観光行動を解説している。

以上がおおまかな本書の概要である。それでは評者の立場から本書の特色について述べたい。本書は、トピック的な節の構成でとてもわかりやすく、東京の生活都市としての地域の特徴とその課題を議論するための素材を提供している。また、知識を補完するためのコラムが配置されている。そのため、本書は小・中・高校の地理教育における身近な地域学習や日本地誌の東京の学習に優れた教材集といえる。評者の欲張りかもしれないが、新学習指導要領に対応して、各章で教材化が具体的に示されると分かりやすかった。また、本書は大学での都市地理学や地誌学、東京の調査研究などにも幅広く活用できる。

最後に、シリーズ本として本書が刊行できることは、小学校から大学まで多様な教員を数多く養成してきた東京学芸大学地理学研究室とその同窓

会組織である東京学芸大学地理学会の底力といえる。2021年には、最終巻の5巻が出版予定なので期待したい。是非、多くの先生方に読んで頂き、本書をはじめ本シリーズを活用した授業が実践され、色々と評価されることを願う。

(深瀬浩三)

千葉県高等学校教育研究会地理部会編『新しい地理の授業 高校「地理」新時代に向けた提案』二宮書店、2019年11月刊、222p., 2,500円(税別)

2020年度から始まる「地理総合」(2単位)は「地図や地理情報システムで捉える現代世界」、「国際理解と国際協力」、「持続可能な地域づくりと私たち」の3部から構成される。高校地理が必修化されることは大変喜ばしい事と思われるが、地理ではなく歴史や公民を専門とする先生方や、教育経験の少ない若い地理の先生方の中には、「地理総合」をどのように教えるか不安を感じる教員も多いのではないだろうか。本書は、このような不安に応えるため、経験豊かな教員が「地理総合」の構成に従って、これまでの蓄積をあてはめ、授業実践をもとに指導方法や授業展開を執筆したものである。

本書は3章から構成されており、具体的な内容は以下のとおりである。まず、第1章「地図や地理情報システムで捉える現代世界」の「1. 地図は身近な存在」では様々な地図が使われており、ミニ巡検の企画、簡易な地球儀の製作など、これまで続けられてきた地図学習のノウハウが紹介されている。「2. 紙上でGIS、空間分析の初歩」では、バッファ生成とボロノイ分割といったGISの手法を紙地図での作業で理解させようとしている。「3. GISを活用した授業実践」では、GISフリーソフトを用いて、様々な投影法での世界地図

描画や、気温や降水量の地図化などが説明されている。「4. 「地理総合」に向けての交通の授業」では交通の発達と社会変容をテーマとして、モノレールのルート計画などを事例とした授業が紹介されており、空間的視点を重視して地域問題に取り組みせようとする工夫が興味深い。「コラム1 オリジナル問題がつかれない」では、オリジナルの問題を自作しようとしても、地図の加工や数値データ表の作成技術に乏しいことによる苦勞が語られている。

第2章「国際理解と国際協力」の第1節「生活文化の多様性と国際理解」における「1. 大気大循環は難しくない」では、大気大循環や恒常風などの自然地理の知識をストーリー立てて解説し、それと歴史的視点と組み合わせる説明が紹介されている。「2. 気候学習から規則性を発見させる」では、ケッペンの気候区分から空間的規則性を発見させる試みが紹介され、単なる地域区分に陥らないための工夫も述べられている。「3. 日常生活中で無意識にかかわっている産業の恩恵と副作用」では、市外局番や郵便番号と物流との歴史的な結びつき、宇宙基地の立地条件など、産業の授業を身近なものにする工夫が紹介されている。「4. 多国籍企業について調べ、発表を取り入れたアクティブ・ラーニング」では、グローバル化に関する生徒の発表と、それに対する教師側の講評、発表を聞いた生徒の感想が記載されており、これを基に様々な授業のアイデアを練ることができる。「5. 「アルプスの少女ハイジ」から学ぶアルプスの自然と人々の生活」は、有名なアニメーションを地理的視点で解説し、地理の面白さを伝えようとする授業実践報告である。生徒達の感想を見ると、最初に作品をいかに魅力的に伝えるかが重要な鍵となりそうな気がする。「6. 生活・文化の多様性と国際理解 世界の言語・宗教」では、日常会話や年中行事を事例として国際理解